

くらし + 健康

全国で「遊びのボランティア」普及

入院中の子どもは家族や友達と離れ、つらい治療に向き合わなければならぬ。付き添う親も、不安や疲労を募らせていく。そんな子どもたちの遊び相手となり、楽しい時間を提供するボランティアが、全国の小児病棟で増えている。子どもたちには笑顔を、親にはつかの間の休息をもたらす活動だ。各地のボランティアが交流する「全国小児病棟遊びのボランティアネットワーク」も昨年発足し、人材育成や社会への情報発信などを目標に動き始めた。

「こんにちは」。週末の静かな病棟に明るい声が響く。昨年11月下旬、東京・新宿の国立国際医療研究センター病院。NPO法人「病気の子ども支援ネット 遊びのボランティア(通称ガラガラドン)」の男女メンバー14人が、入院中の子どもたちを訪ねてきた。1〜6歳の男の子4人

小児病棟に笑顔の輪を

点滴の管がつながった手でボランティアとおもちゃ遊びをする男児
＝東京・新宿の国立国際医療研究センター病院



楽しく工作、親も気分転換

の病室で、クリスマス用飾りの工作が始まる。作業に熱中していた男児(6)は「上手だね」とメンバーから口々にほめられ、ちょっと得意顔だ。ぜんそくで何度か入院を繰り返しているため、院内での遊びは経験済み。今回も「いつ来るかな」と心待ちにしていた

▽医療の高度化

という。母親(32)は「本人だけでなく私も気分転換できました」と感謝の言葉を口にする。▽医療の高度化 「遊びは子どもの健全な発達に欠かせません。しかし、病院という閉鎖的な環境では十分に遊ぶことが難しい」とガラガラドン理事長の坂上和子さん(60)は語る。ガラガラドンの設立は1991年。もともと新宿区民の子どもを対象に病院を回る訪問保育士だった坂上さんが、保育士仲間5人とともに立ち上げた。以来20年以上、毎週土曜日に同病院への訪問を続けている。医療の高度化で医師や看護師の負担は増えるばかり。時間をかけて子どもたちと向き合う余裕はない。一方で子どもたちは、苦しい検査や治療に耐えながら、それでもなお、遊びを求めてやまない。「医療スタッフができないことを、横から支えるのが私たちの役割です」と坂上さんは話す。

▽強いプロ意識

だが、ただ遊べばいいというものではない。病院という特殊環境で事故や感染をいかに防ぐか。活動には的確な状況判断とスキルが求められる。この日も冬場に流行するRSウイルス感染症の子どもが多かったため、プレールームでの集団活動を急ぎよ病室へと変更。メンバーも感染防止用のガウンや手袋を着用し細心の注意を払った。看護師の乾瑤子さん(28)は「メンバーはプロ意識が強い。子どもの年齢ごとにどんな遊びが発達を促すかも分かっている。とても助かっています」と信頼を寄せ

る。一昨年1月、坂上さんをはじめ、神奈川、愛知、鹿児島各県で活動に取り組む4人が発起人となり初の交流集会を開催。9団体27人が参加し、全国ネットを設立した。さらに昨年2月の第2回集会には100人近くが詰めかけ、活動の広がりを感じさせた。今後は国や自治体にも働きかけ、遊びのボランティア普及に努めていく考えだ。

「ボランティアを受け入れてくれない病院もまだまだ多い。信頼を得るには、活動の質をより高めていく必要があります」と坂上さんは話す。